

大学入学者の学力の保持と変化について

ー共通第1次学力試験，大学入試センター試験のモニター
調査データを基にしてー

平 直樹

大学入学後には、受験勉強で培われた学力はどれほど保持され、どのように変化するのであろうか。

本研究では、この問題に関して実証的に論じるため、昭和59年度から平成3年度にかけての8年間のモニター試験本試験の結果とそれぞれその前年度の大学受験時の共通第1次学力試験（大学入試センター試験）の結果をパーセンタイル順位に換算し、比較検討した。

まず、総得点においては、メディアンで約5パーセンタイル程度学力が低下する現象が見られた。

各教科・科目ごとに見た場合、国語、数学、英語に比較して、社会、理科の学力低下が著しいことが分かった。特に、

理系の社会はメディアンで約19パーセンタイル、文系の理科は約22パーセンタイルも低下し、50パーセンタイル以上学力を低下させた者も稀ではなかった。科目ごとに分析すると、社会の中では世界史、日本史、理科の中では化学の学力低下が特に大きかった。

文系・理系を比較した場合、大学受験時の差が拡大する方向で学力低下が起こることが分かった。

個人の学力特性という側面では、得意教科と不得意教科の差が大きくなる現象が見られた。

これらの現象を説明するために、教科・科目の学習内容や試験問題の性質、入学後の経験に関して調査する研究が必要である。